

## 退職園長による子育て塾(6)

# 自然の中で心を通わせること

戎 喜久恵

### 石段の四季

分校から子どもの足で、十分ほどのところに神社があります。神社への石段は、自然の石を組み合わせてありますから、でこぼこしていて味わいがあります。子どもたちはこの石段で様々な四季

に出会います。

春には石段の隙間には薄紫の小さなスマイレが咲きます。雨上がりには大きなミミズに出会います。子どもたちは思いのほかのミミズの逃げ足の早さに怖さを忘れて追いかけます。庭の小さなミミズを怖がっていた子がここではミミズと友達に

なるから不思議です。

夏にはこの石段は樹木に覆われ、セミの鳴き声のシャワーが降り注ぎます。声の主を見つげようと見上げている子どもたちに「チィ」と小さな水滴をかけてセミは枝から枝へと飛び移ります。

移った先で「ここだよ」といわぬばかりに「ミーミー」「セツセツセツ」と鳴き始めます。声を頼りに「この辺りだ」と近づくと「セツセツセエー」と長い声を最後に鳴きやみます。保護色のセミは目を凝らさないとなかなか見つかりません。やっと見つけて網で採ろうとすると網の隙間から飛び立ちます。子どもたちは飛び立ったセミの行方を目で追います。こんどこそは……。いつの間にかセミと追いかけてっこをしているのです。秋には木の実がたくさん見つかります。足下には大小のドングリ、見上げるとピナンカズラの赤い実や口を広げた甘い匂いのアケビも見つけるこ

とができます。子どももの頃に自然体験のあるお母さんやスタッフがそうでないお母さんや子どもたち「懐かしい、昔はね……、こうやってね……」と自然へのかかわり方を伝授しています。伝授するお母さんの笑顔は子どもたちを活気づけています。お母さんと同じようにやってみたいのです。

石段を登り切るとそこは一面の落ち葉です。夏に薄暗かった空間が明るくなっています。

「はよー、来てミー。おかあさん」

「黄色のじゅうたんだよー」

「もつと、いっぱい、落としてー、お・ね・が・いー」

両腕にいっぱい落ち葉を抱えて投げあげる子、寝転がる子、投げあげた落ち葉がひらひら舞う様子を母親に何度も見せる子、ウサギの布団にしてあげるとビニル袋に集める子、ブーケを作る子、樹



▲石段を登り切ると……

をトントンと揺する子など、子どもたちは思い思いに落ち葉に戯れます。

冬には葉っぱが落ちてすっかり明るくなった石段は暖かい日だまりとなります。落ち葉をめくると秋の名残のドングリや冬支度をしている小さい虫に出会えます。興味本位に行動する子らに「冬眠のじゃまをするなよ」とイエローカードを出すのはちよつと先輩気取りの小学生です。このイエローカードはグッと効き目があるから不思議です。

石段は四季折々の環境を整えて私たちを迎えてくれます。

今はもう幼稚園に通い始めたえいきくんがやつとしっかりした足取りで歩き始めた頃、「危ないから……、みんなに遅れるから……」と抱っこをしようとするおばあちゃんの手を振り払って一段

一段と自分の足で（手も使って）登り切りました。登り切ったえいきくんの自信に満ちた笑顔は一緒に登った一同の心を温かくしました。そして、えいきくんがみんなの「よく頑張ったね」という自分への賞賛を体中で受け止めているのが伝わってきました。帰りの石段ではおばあちゃんの

手の指をしっかりとつかんで一歩バランスを取りながら降りていくえいきくんの姿がありました。仲間のみんなに見守られながら頑張っているえいきくと「ありがとうございます」とみんなに頭を下げるおばあちゃんの姿に感動を覚えました。わずか一歳にして自分にできることは意欲的にやってのけ、自分に足りないところは信頼するお



▲「もっと、いっぱい、落としてー」

ばあちゃんの力を少しいただいでやってのけたのです。そして、自分に向けられる温かいまなざしをしっかりと受け止めてそれに応えているのです。石段にしっかりと自分の成長を刻みつけたのです。この次石段に現れたとき、おばあちゃんや仲間、そしてえいきくんは「あのとときは、……だっ



▲帰りの石段もバランスを取りながら

たのにな」と石段の記憶を呼び起こし、さらに成長したえいきくんの記録を残すのです。

おばあちゃんのにじサタデー

孫が初めてのにじサタデーに参加させて頂いたのが平成十四年二月だったと思います。

教室にはいるときは、緊張と少しの不安がありました。挨拶をするのが先生が「おにぎりしよう」と言ったらサララップにごはんを載せて手渡してくれました。この瞬間不安はどこかに飛んでいってしまいました。それから毎月、毎月楽しみに参加させて頂いています。毎月貴重な体験ばかりですが、印象に残っているのは、九月の栗拾いです。当日は雨模様だったので、雨衣と長靴を用意し、でかけました。孫は転びながらもみんなについて一生懸命歩いていき、栗拾いに挑戦しました。先生のお兄様が年齢の低い子どもには、大

きな栗の枝を下げて、栗を落としてくださいます。この日のために購入したトンクを使ってたくさん収穫することが出来ました。イガイガの中から茶色に光った栗を取り出す孫の得意そうな顔は、今も忘れることが出来ません。お兄様は、雨の中、遅れて参加した子どもたち一人一人に「栗、あつたかな」と声をかけて、栗の枝を揺すつてくれました。横にいた私はこのあたたかい状況を見て感謝の気持ちでいっぱいになりました。栗拾いで孫も私も多くのことを学び、直接体験のすばらしさを理解することが出来ました。「子育ては、親育て」と言いますが、私にとって「孫育ては、自分育て」と思っています。これからも孫と共に自分の成長の場を積極的に求めていくことが大切だと思っています。

『レインボー通信』より（えいきバーバ）



▲雨の中、栗拾いに挑戦

## ママと家族のにじサタデー

「お父さん、ここ曲つたら、にじサタよ」と、私。

「ああ、気持ちいいところやなあ」

「この校舎といい、大きい木といい、ほんま、おまえたちはいつもいいところで遊ばせてもらってるなあ……」と大きな楠を見上げていました。

「ほんと、そうなんだよね」と言いながら、あらためてこのすばらしい環境に感謝の気持ちを抱きました。

この前、おやつのこととで機嫌を悪くしたAちゃんがいました。すぐくへそを曲げて大泣きでした。我が子はその状態なら「もう、いつまで泣ききよん！」と一喝でしょうか。

まさにだだをこねる状態。そんな中、その子どもの前にひざまずいて下からのぞき込むようにお

話している先生の姿がありました。「ほんまになあつ」と一緒にうなずいていました。しばらくしてAちゃんの顔がほころびました。

「子どもはみんな自分の気持ちを聞いてほしいのよ。いま、僕はこんないやなことがあって、こんなに怒っているんだ」と。それをわかつてあげなくちゃあ。そうよね。そんなことあつたら私もきつと怒るよ」と思えるくらい聴いてあげることよ」「大人もそうでしょう。誰かに聞いてもらえば気が晴れたり、すつとするでしょう。頭ごなしに泣かないの」では子どもはよけい腹立たしく、悲しくなるでしょう。ただし、気持ちをわかつてあげることと要求どおりしてあげるとは違うわよ」

ああそうだ。本当に。私も辛いときや悲しいとき、母がそんな気持ちをわかつてくれたらどんなに幸せだったろう。そんな自分であったことを

すっかり忘れ、クナによ、それくらい“って子どもに言い放っていた私。今、母親としてせめてあたたく子どもをの気持ちを抱んであげなくっちゃあ、とつくづく感じました。

子育てを始めた頃は変に力が入って、きっちり育てなくてはなんて思っていたけれど、育てられていたのは私だったのかも、なんて思います。あたたかい人たちと自然の中で未熟な母親である私の修行はまだまだ続きます。

帰りの車の中で、夫がポツリとつぶやきました。「ああ、今日は一秒がゆつくり進んでる気がしたなあ」

『レインボー通信』より、(T—mama)

## 最後に

この原稿を毎号いや一度でもお読み頂いた方は、「子育て塾？ 育てられているのは誰？」と

か、「退職園長の暇つぶし、お遊び」と理解して頂いたことと思います。まさにそのとおりだと思います。子どもたちやその保護者の方に感謝しているのは、実は私たちスタッフなのです。生き甲斐をいただいているのです。今、「子育て支援」「子育てセンター」と子どもを育てることに力が入っていますが、実は、子どもと心を通わせ、子どもという楽しさをひとときでも味わい、親として子どもに育てられる感覚が得られる場や機会を持つことが必要なのではないでしょうか。月一回のにじサタデーがそんな場になればと願っているのです。

(神戸女子大学)

☆このシリーズは今回で終わります。